

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 4 月 20 日現在

機関番号：15401
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007 ～ 2010
 課題番号：19520232
 研究課題名（和文） フランス中世における文学の場の総合的研究
 研究課題名（英文） Synthetic studies on circumstances of literature in Middle Ages in France
 研究代表者
 原野 昇（HARANO NOBORU）
 広島大学・大学院文学研究科・名誉教授
 研究者番号：80069161

研究成果の概要（和文）：

フランス中世における文学の場に関して、(1) キリスト教、(2) 宮廷、(3) 農民と都市民という3つの文学の場を区別して考察することが有効である。詳しくは以下の図書（いずれも共著）の一部としてまとめることができた。『芸術のトポス』（木俣元一と共著、岩波書店、2009、pp.17-148, 291-302.）／『イギリス・フランスの中世ロマンス—語学的研究と文学的研究の壁を越えて』（今井光規ほかと共著、音羽書房鶴見書店、2009、pp.11-50.）／『中世ヨーロッパの祝宴』（水田英実ほかと共著、溪水社、2010、pp.82-115.）／『中世ヨーロッパにおける伝統と刷新』（水田英実ほかと共著、溪水社、2009、pp.87-134.）／『中世ヨーロッパにおける笑い』（水田英実ほかと共著、溪水社、2008、pp.81-110.）／『中世ヨーロッパにおける女と男』（水田英実ほかと共著、溪水社、2007、pp.137-184.）

研究成果の概要（英文）：

Concerning the circumstances of literature in Medieval France, it is useful to distinguish three following categories : (1) Christianity, (2) Court, (3) Farmers and citizens. We have published the results of our studies on circumstances of literature in Medieval France in the following books. *Topos of arts* (Iwanami, 2009, pp.17-148, 291-302.) / *Medieval romances in England and France --- Over the barriers between linguistic and literary approaches*, (Otowatsurumishobo, 2009, pp.11-50.) / *Feasts in Medieval Europe* (Keisuisha, 2010, pp.82-115.) / *Tradition and Innovation in Medieval Europe* (Keisuisha, 2009, pp.87-134.) / *Laughter in Medieval Europe* (Keisuisha, 2008, pp.81-110.) / *Women and Men in Medieval Europe* (Keisuisha, 2007, pp.137-184.)

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：フランス中世文学・語学，文献学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：フランス文学，ヨーロッパ中世，西洋史，文学の社会学

1. 研究開始当初の背景

従来のフランス中世文学研究は、生み出された作品を前に、通時的視点を中心として、各作品の内容および形式を手がかりにいくつかのジャンルに分類してなされてきた。すなわち、聖人伝、南フランスの抒情詩、北フランスの抒情詩、シャンソン・ド・ジェスト、宮廷風騎士物語、アレゴリー文学、ファブリオ、動物叙事詩、演劇、博物誌、歴史もの、などである。これらのジャンル分類もそれなりに時代背景や社会的な状況を反映したものであり、古代、中世、近世・近代を通して続く人間の文学活動においてフランス中世文学の特質を浮き彫りにするのに有用である。しかしながら、各作品の内容や形式を中心として文学にアプローチするのみでなく、社会における人間の諸活動のなかに文学活動を位置づけることによって、フランス中世文学の特質が浮かび上がってくることも考えられる。本研究においては、そのような立場から「文学の場」という概念を導入して、フランス中世文学の研究を深めようとしたものである。

2. 研究の目的

(1)生活の質の向上としての文学

古来繰り返されている人間の一生の諸活動、すなわち生命維持活動、社会システムにおける活動、余暇の活動を、個人のレベル、集団のレベルにおいて考察すると、それは一生の生活の質（クオリティ・オブ・ライフ）の向上への努力とみることができよう。音楽、絵画、彫刻、建築、演劇、文学などの芸術諸活動をその最も重要な活動ととらえ、本研究では、フランス中世文学を研究対象とし、21世紀における生活の質の向上への手がかりを得ることを目的とする。

(2)文学の場とは

「文学の場」とは、作者が作品を生み出す場、語り手など媒介者の場、聴衆や読者が作品を鑑賞・享受する場、のことである。媒介者は作者が兼ねる場合もある。すなわち、作者から聴衆／読者に、作品が直接渡される場合である。一連の文学活動をロベール・エスカルピ Robert Escarpit (『文学の社会学』 *Sociologie de la littérature*) に倣って、生産—流通—消費の図式でとらえるならば、作品創造（生産）—作品の公刊、伝播（流通）—作品の受容（消費）ということになる。そのそれぞれについて、またその全体について、いつ、誰が、どこで、どのようにして、どのような動機でそれらに関わったか、などが文学の場である。

ここで言う「場」とは、空間的な場所のみならず、時間的な場、すなわち機会、また社会システムの中における場、すなわち作者、媒介者、鑑賞者の身分や人間関係などの社会的な環境、さらにはその社会のイメージーションのあり様も含む。言い換えれば、文学という人間の営為が行なわれる、自然的環境、社会的環境、思想的環境のことである。

文学活動を、作者による作品創造—伝播—鑑賞者（聴衆／読者）による作品の鑑賞・享受のシステムにおいてとらえ、時代および地域によるその変遷や種々相を文学社会学の研究対象としたエスカルピの枠組みを参考にし、本研究はフランス中世における作者の社会的立場、写字生による写本制作の実態、聴衆／読者による作品の鑑賞・享受の実態を明らかにすることを目的とする。

したがって本研究では、まず第一に、個々の文学作品は、社会的にどのような地位の人によって創作されたのか、その作品の写本制作はどのような人の意志によって決定され実行に移されたのか、実際の書写作業にあた

った写字生はどのような教養を積み、書写作業の技術はどこでどのように伝授され、受け継がれていったのかなど、写本制作の実態を文学の場の視点から明らかにしていく。

「今—ここ」を共有しない人、すなわち遠く離れた場所にいる人、将来生まれてくる人に、人類が発見、発明、創造した知を受け渡す手段が本であるが、フランス中世にあっては、それは写本という形である。すなわち、グーテンベルクの活版印刷の発明以降のように、1つの版から何百冊もの同一テキストが出来上がるのではなく、写字生によって何時間もかけて、1ページ1ページ、1行1行、1文字1文字、手で書き写された結果、ようやく1冊の副本（コピー）が出来上がるのである。その意味でも、文学の場の研究における写本制作の実態を究明することは重要である。

3. 研究の方法

(1) パリのフランス国立図書館、サント・ジュヌヴィエーヴ図書館、ジュネーヴのポドメル博物館などにおいて、そこに収蔵されているフランス文学作品の写本をできるだけ多く調査する。そして各羊皮紙写本において、テキスト本文以外の朱見出し（*rubrique*）、エクспリシット（*explicit*）、および落書きなどのパラ・テキストを手がかりに、フランス中世写本制作の実態を調査する。また、写本巻頭などに記されていることがある、写本制作依頼者などについての情報も調査し記録する。さらに写本巻末などにときどき書き加えられている写字生の本音（辛い写字の仕事の実態など）も調査する。これらの作業は、狭い意味でのテキストの外部から「文学の場」の実態に迫ろうとするものである。

(2) できるだけ多くのフランス中世文学作品の校訂本を調査し、その中にみられる作者あ

るいは写字生から聴衆／読者への呼びかけのことばを調査する。これらの作業はテキストの内部から「文学の場」の実態を明らかにしようとするものである。

(3) 内外の歴史研究者による、ジョングルーの生活実態、宮廷内における騎士および女性の生活実態など、「文学の場」に関連する研究書を調査し、史・資料に基づく証言を集める。

(4) ポワチエ大学のガブリエル・ビアンチョット名誉教授、慶応義塾大学の不破有理教授など、国内外の研究協力者と研究打ち合わせを行う。

(5) 池上俊一・東京大学大学院教授、河原温・首都大学東京大学院教授、佐藤彰一・名古屋大学大学院教授を中心とする、ヨーロッパ中世を多面的に考察する研究グループの一員として、木俣元一・名古屋大学大学院教授とともに、ヨーロッパ中世における人間の芸術活動の特質を明らかにする仕事を分担した。木俣教授は主として美学の視点から、本研究代表者の原野は文学の視点から考察した。

(6) 1999年に、山代宏道・広島大学名誉教授、同水田英実・名誉教授、中尾佳行・広島大学大学院教授、同地村彰之教授らと広島大学ヨーロッパ中世研究会を創設し、ヨーロッパ中世を対象に、歴史学、哲学、宗教学、イギリス文学・語学、フランス文学・語学など、多角的視点から考察を続けている。本研究開始後も、ヨーロッパ中世における「女と男」、「笑い」、「伝統と刷新」、「祝祭」などのテーマを設定し、本研究代表者の原野は文学の場の視点から、フランス文学を中心に考察した。

4. 研究成果

(1) 池上俊一・東京大学大学院教授、河原温・首都大学東京大学院教授が中心となって、

それまでの研究成果を「ヨーロッパの中世」全8巻(岩波書店, 2008-2010)にまとめた。すなわち, 佐藤彰一『中世世界とは何か』, 河原温『都市の想像力』, 小澤実/薩摩秀登/林邦夫『辺境のダイナミズム』, 関哲行『旅する人びと』, 堀越宏一『ものと技術の弁証法』, 大黒俊二『声と文字』, 原野昇/木俣元一『芸術のトポス』, 池上俊一『儀礼と象徴の中世』である。そのなかで, 本研究代表者の原野は木俣元一・名古屋大学大学院教授とともに, 『芸術のトポス』というタイトルでそれまでの研究成果をまとめた。具体的には, 第I部「社会のなかの文学」として, 第一章「文学の場としてのキリスト教」, 第二章「文学の場としての宮廷」, 第三章「文学の場としての農民と都市民」である。そして, 第II部「人間とイメージ—中世美術へのアプローチ」(木俣元一教授担当部分)を含めた結語として, 終章「ホモ・フィンゲンス(表象する人間)」にまとめた。

(2) 一方, 広島大学ヨーロッパ中世研究会における研究成果として, 『中世ヨーロッパの祝宴』(溪水社, 2010), 『中世ヨーロッパにおける伝統と刷新』(溪水社, 2009), 『中世ヨーロッパにおける笑い』(溪水社, 2008), 『中世ヨーロッパにおける女と男』(溪水社, 2007)にまとめたが, 本研究代表者の原野は, それぞれにおいて, 「フランス中世文学にみる祝宴」, 「フランス中世文学にみる笑い—笑いの社会性」, 「フランス中世文学にみる伝統と刷新—トリスタン伝説を例に」, 「フランス中世文学にみる女と男」としてまとめた。

(3) また, 今井光規・摂南大学学長, 隈元貞広・熊本大学文学部教授, 山口恵里子・筑波大学大学院准教授, 田尻雅士・元大阪外国語大学助教授, Maldwyn MILLS・ウェールズ大学名誉教授らとの共同研究の成果を, 『イギリス・フランスの中世ロマンス—語学的研究

と文学的研究の壁を越えて』(音羽書房鶴見書店, 2009)にまとめたが, 本研究代表者の原野は, 「フランス中世文学におけるロマンス」としてまとめた。そのなかで, 特に写本における写字生のプロローグ, エピローグ, コメントなどをとりあげ, 「文学の場」に迫った。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計1件)

① HARANO Noboru, *Sous quel nom désigner une partie du ms.H du Roman de Renart ?, Reinardus*, 査読あり, vol.19, 2007, pp.75-82.

[学会発表] (計2件)

① 原野昇 「『狐物語』第3枝篇とその源泉」, 第28回広島大学フランス文学研究会, 2009年8月1日, 広島大学

② 原野昇 「フランス中世文学におけるロマンス(物語)再考」, 第26回広島大学フランス文学研究会, 2007年7月21日, 広島大学

[図書] (計6件)

① 原野昇ほか, 溪水社『中世ヨーロッパの祝宴』2010, 175p. (pp.82-115.)

② 原野昇・木俣元一, 岩波書店『芸術のトポス』2009, 314+6p. (pp.17-148, 291-302.)

③ 原野昇ほか, 音羽書房鶴見書店『イギリス・フランスの中世ロマンス—語学的研究と文学的研究の壁を越えて』, 2009, 190p. (pp.11-50.)

④ 原野昇ほか, 溪水社『中世ヨーロッパにおける伝統と刷新』2009, 198p. (pp.87-134.)

⑤ 原野昇ほか, 溪水社『中世ヨーロッパにおける笑い』2008, 182p. (pp.81-110.)

⑥ 原野昇ほか, 溪水社『中世ヨーロッパにおける女と男』2007, 186p. (pp.137-184.)

[その他] (計11件)

- ①原野昇「生きものの言語活動」『流域』68号（印刷中）
- ②（項目執筆）原野昇「宮澤賢治における寓話の特質—狐ものを中心に」, 天沢退二郎, 金子務, 鈴木貞美編, 弘文堂『宮澤賢治イーハトヴ学事典』2010, pp.140-142.
- ③（シンポジウム発表）原野昇「フランス中世文学にみる1日のリズム表現」, 広島大学ヨーロッパ中世研究会, 2010年11月18日, 広島大学
- ④（書評）原野昇「マリ・ド・フランスはトマス・ベケットの妹!」, 『流域』66号, 2010, pp.38-44.
- ⑤（シンポジウム発表）原野昇「フランス中世文学にみる祝宴」, 広島大学ヨーロッパ中世研究会, 2009年11月12日, 広島大学
- ⑥（書評）原野昇「象徴史の確立—ミシェル・パストロー『ヨーロッパ中世象徴史』」, 『流域』64号, 2009, p.48-53.
- ⑦（翻訳・紹介）原野昇「一写本の運命」, 『広島大学フランス文学研究』28号, 2009, pp.1-10.
- ⑧（報告）原野昇「第22回国際アーサー王学会—レンヌ大会—報告」Newsletter（国際アーサー王学会日本支部）No.21, 2008, pp.4-7.
- ⑨（シンポジウム発表）原野昇「フランス中世文学にみる伝統と刷新—トリスタン伝説を例に」, 広島大学ヨーロッパ中世研究会, 2008年11月13日, 広島大学
- ⑩（書評）原野昇「身近になった中世古典—ギョーム・ド・ロリス, ジャン・ド・マン著, 篠田勝英訳『薔薇物語（上）（下）』」, 『ふらんす』2007年12月号, p.72.
- ⑪（シンポジウム発表）原野昇「フランス中世文学にみる笑い—笑いの社会性」, 広島大学ヨーロッパ中世研究会, 2007年11月15日, 広島大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

原野 昇 (HARANO NOBORU)
広島大学・大学院文学研究科・名誉教授
研究者番号：80069161

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：